

農作物技術情報 第1号 花き

発行日 平成30年 3月 15日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<http://i-agri.net/Index/gate002>」

- ◆ りんどう 春の株管理と施肥を適期に実施しましょう
- ◆ 小ぎく 定植時期に合わせた計画的な育苗管理を行いましょう

りんどう

1 生育の状況

地域によっては、極早生種の萌芽が始まっています。融雪時期等の違いから萌芽・展葉の初期生育は、地域により差が見られることが予想されます。圃場をよく観察し、生育に応じた管理を適切に行い、順調な生育を促しましょう。

2 圃場管理

(1) 融雪促進対策

融雪を促進する手段として炭の粉を散布する方法があります。散布後、降雪があると効果が期待できませんので散布するタイミングに注意してください。

(2) 株の保護

昨年定植した圃場では、冬期間に株が浮き上がっている場合があります(写真1)。雪解け後に早めに圃場を見回り、植え直しや土寄せなどの対策を施し、株落ち被害を軽減しましょう。

マルチを除去している圃場では、畦の肩部分が崩れて根が露出することがあります(写真2)。生育への影響が懸念されるので、早めに土寄せ等で補修し、根やクラウン部を保護しましょう。



写真1 冬期間に浮き上がった株



写真2 畦が崩れ根が露出した株

3 病害虫

枯れた茎を昨年の秋に除去していない圃場では、早めに除去し圃場外へ処分します。特に昨年リンドウホソハマキが発生した圃場では、枯れた茎内で幼虫が越冬している可能性が高いので、雪解け後に枯れた茎の処分を徹底しましょう。

4 施肥

(1) 施肥量

初期生育確保のため、春の施肥は雪解けから萌芽期頃までに遅れないように早めに施肥します。特に極早生種や早生種は、施肥が遅れることで草丈不足など品質が低下することがありますので、早めの施肥を心がけます。なお、肥料の種類により肥効に差があるので、その点も考慮します。

施肥量は窒素・リン酸・カリ各 10～12kg (10a 当たり成分量) が基準ですが、土壌診断の結果や前年度の生育を参考に、過剰とならないようバランスのとれた施肥とします。また、鶏ふんや豚ふん由来の堆きゅう肥の施用量も考慮して施用します。なお、肥料焼けを起こさないように芽 (マルチ穴) の付近にまとまって施用しないよう注意します。

(2) 2年目圃場

昨年定植した圃場で定植後 2 年間肥効が継続するといわれている肥料を使用した場合には、基本的には 2 年目の施肥は不要となります。ただし、生育の状況を随時観察し、肥料不足で生育が思わしくない場合は適宜速効性肥料の追肥を施し生育を促します。特に過湿ぎみの圃場条件では、注意して生育を観察してください。

5 育苗

(1) 播種後の管理

育苗は温度管理と水管理がポイントです。適切な管理を心がけましょう。

特に出芽揃いまでは適温確保に努め、短期間での出芽揃いを目指します。その後は徒長を避けるために温度を下げるとともに、適宜換気を行い締まった苗を作ります。

灌水は、乾燥や過湿を避ける管理とします。病害の発生を減らすため、夕方には培土の内部には水分があり表面は乾いている状態になるように、灌水の時間帯や灌水量に留意します。

苗数の不足が懸念される場合は、2 次根発根前に早めに間引きを行い、間引いた苗や余裕のある苗を別のセルトレイに移植し、予備苗を確保します。

(2) アルタナリア菌による苗腐敗症の予防

育苗期に発生するアルタナリア菌による苗腐敗症は、種皮に付着した病原菌が伝染源となり、子葉で発病した後、本葉に伝染します。適用殺菌剤による種子消毒に加えて、本葉 2 対目が出始める時期に薬剤散布することで、以降の病勢進展を抑制します (写真 3)。



写真 3 本葉 2 対目の出始め (薬剤防除時期) ※子葉に苗腐敗症発生

6 定植圃場

定植予定の圃場に春に堆肥を入れる場合は、定植期近くの施用とならないようできるだけ早めに施用し、耕起しておきます。また、排水不良圃場では、畦畔の内周に排水溝を設置する等対策を講じておきましょう。

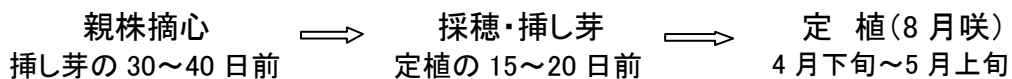
小ぎく

1 生育状況

親株の生育は、概ね順調な生育となっています。生育が遅れている圃場では、できるだけ保温に努め、生育を促進させましょう。

2 育苗（挿し芽）

8月咲き品種では、品種に応じた定植時期を定め、その時期に適期の苗を定植するよう計画的に作業を進めます。定植期は品種特性と各地域の気象条件を考慮して決めます。老化苗は開花期や切り花品質へ影響するため、作業スケジュールや育苗管理に注意します。



挿し床の温度は地温 20℃、気温 16℃が最適で、水分は多すぎない方が早く発根します。また、挿し芽後はしおれを防ぐために遮光しますが、徐々に光にあてて徒長や葉の黄化を防止します。温度・水・光管理を適切に行い、20日間以内の育苗期間をめざします。

9月咲き品種の挿し芽時期は5月上旬以降となります。4月上旬が親株の摘心時期となりますので、生育状況に合わせ温度管理を調節します。生育が進んでいる場合は、軟弱な生育や側枝の伸びすぎを避けるため低めの温度管理とします。

また、気温が上昇するとともに親株の白さび病やべと病等の発生が増加しますので、換気によりハウス内の湿度を下げる事に加え、薬剤散布により予防します。

3 定植圃場

定植予定の圃場に春に堆肥を入れる場合は、定植期近くの施用とならないよう早めに施用し、耕起しておきます。また、排水不良となりやすい水田転換畑では明渠、暗渠などの排水対策をあらかじめ講じておきましょう。

次号は4月26日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター・地域普及グループは、地域農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。